

2. 留学生相談部門

留学生相談部門の活動対象は、1) 一橋大学に在籍する留学生、2) 留学生の支援や交流を希望する日本人学生、3) 留学を希望する日本人学生、及び 4) 留学生の問題を解決するために連携する教職員や地域社会の人々である。2008 年度の留学生相談部門の業務は、留学生センター相談部門教員（阿部仁）と留学生センター兼務で各研究科に所属する留学生専門教育教員（商学研究科：秋庭裕子、経済学研究科：井村倫子〔2008 年 6 月まで。以降 2008 年 8 月から 2009 年 3 月まで留学生センター契約事務職員〕、法学研究科：柘植道子、社会学研究科：河野理恵）が担当した。

留学生相談部門の教員は各種学生支援に携わっている。これらの支援業務は 1) 主に外国人留学生の相談に応じ、問題解決を図る「相談活動」、2) 外国人留学生の適応上の問題を未然に防いだり異文化への認識を高めていく「予防・開発的活動」と、3) 日本人学生および外国人留学生に対する「海外留学相談と短期海外研修実施」の三つに分けられる。

「相談活動」の中心は、アドバイジングとカウンセリングであり、治療的な面接から情報提供まで幅広い活動が含まれる。主に留学生を主な対象とした「予防・開発的活動」には、a) オリエンテーション・プログラムやガイドブックの出版、各種チューター制度の運営など留学生の異文化不適応を予防する活動、b) 国立や小平地区の留学生宿舍運営指導、c) 学生国際交流誌『Bridges』の編集、d) コミュニティによる生活支援を促進する活動、e) 探訪旅行など留学生の日本社会や文化を促す活動などがある。また、学生一般を対象とした「海外留学相談と短期海外研修実施」には、f) 留学フェア・TOEFL 説明会の開催、g) 「短期海外研修：国境・文化を超える能力育成プログラム」の実施（オーストラリア、中国、スペイン企業派遣）および h) 海外留学や留学生理解に関する授業の提供などがある。

1 相談活動

1) 相談室の時期、時間及び担当者

夏学期に対応した相談室開室日は 3 月 24 日（月）～8 月 6 日（水）であり、冬学期に対応した開室日は 9 月 29 日（月）～2 月 6 日（金）であった。これらの期間は、概ね月曜日～金曜日の午前 10 時～午後 1 時、午後 2 時～午後 5 時に表 1 の担当表に基づいて留学生相談室を開室した。昨年度も長期休暇中は午前 10 時～午後 1 時まで相談室を開室したが、表 1 に基づく担当ではなく、夏季、春季休業のそれぞれにシフトを作成して開室した。夏季休業期間の 8 月 7 日（木）～9 月 26 日（金）までの開室日 35 日間は、阿部（11 日）、秋庭（6 日）、井村（6 日）、河野（6 日）、柘植（6 日）が担当した。春季休業期間の 2008 年 2 月 9 日（月）～3 月 27 日（金）の開室日 31 日間は、学期中の勤務日数やその他を考慮し、阿部（11 日）、秋庭（5 日）、井村（5 日）、河野（5 日）、柘植（5 日）が担当した。

2. 留学生相談部門

表1 相談室担当者の一覧

曜 日	10 時～13 時、14 時～17 時
月	阿部 仁
火	秋庭 裕子
水	井村 倫子
木	河野 理恵
金	柘植 道子

2) 来談状況の分類

① 相談件数と領域

図1は2008年度の月別来談状況、表2は相談内容別の分類である。一年間でのべ1,445件（昨年度1,261件）の来談者があった。今年度相談件数が一番多かった領域は、昨年同様「チューター」（のべ259件、17.9%）である。これは、留学生と日本人学生によるチューター申込みの登録である。4番目に多い「チューター・オリエンテーション」（のべ131件、9.1%）を含めると、チューター制度に関するものが全体の27%となっている。これは厳密には相談とは言えないが、予防的・開発的な施策の一環として、また日本人学生の教育的な面も持つ活動である。チューター・オリエンテーションとは、チューター制度の有効性を高め、日本人学生と留学生のトラブルを防止するために行っているものであり、チューター候補者と留学生の両者を相談室に呼んで、『日本人学生の海外留学と外国人留学生との交流のための海外留学・留学生交流ハンドブック』をテキストとし、チュートリアルの内容の確認、チュートリアル実施にあたっての注意事項、問題が起きた場合の対処などについて指導している。また、今年からチューターが不足しがちな研究科にかぎって、留学生がチューターとして採用できるよう運用ルールを改訂した。

経済に関する相談は次のように下位分類されている。奨学金相談などの「奨学金」（のべ38件、昨年度60件）、授業料の減免申請のためのサインを求める「減免」（のべ191件、昨年度135件）、そして奨学金申請のための「推薦書」（のべ56件、昨年度53件）である。奨学金に関するものでも、推薦書を実際に書いた場合には「推薦書」として分類している。アルバイトに関するものでは、「アルバイト」（のべ2件、昨年度7件）の相談と資格外活動許可申請のための「副申書」執筆（のべ169件、昨年度143件）が含まれる。以上、経済に関係する来談件数を合計すると、のべ400件（昨年度398件）となる。経済に関する相談内容は生活設計の建て直し、アルバイトや奨学金紹介などになるが、解決は難しいものが多い。心理的に追いつめられていることが多いので、話を聞いていくことでそれでも何とかやっ払いこうという気持ちをもってもらうことが大切である。話の内容には、「どうして私は減免や奨学金がもらえないのか」という制度や審査に対する不満が多く、じっくりと学生の話聞く姿勢が求められる相談事項である。中には、新入一年生が入学と同時

にアルバイトの申請を提出するなど、入学時からしっかりとした資金計画がなかったのではないかと思われる事例も見受けられた。留学生相談室では特別な事情がない限り最初の一学期のアルバイトは許可しないことにしている。

学内の国際交流・異文化交流誌である『ブリッジス (Bridges)』の編集会議や指示に関して来談した件数 (のべ 9 件、昨年度 24 件) は相談ではなく会議参加であるが、近年学生の参加意識が低下し原稿執筆や編集が以前よりスムーズに進まない状況にあった。加えて、インターネットなどの電子媒体を積極的に利用するセンター方針もあり、2008 年度の 3 月をもって最終号 (第 24 号) を発刊する運びとなった。

健康の問題には、身体的な問題 (のべ 12 件、昨年度 16 件) と心理的な問題 (のべ 12 件、昨年度 37 件) がある。心理的な問題については、他の項目と比べると複数回来談するケースが多い。

教育内容とは、授業等の内容に関するものである。昨年度のべ 55 件から今年度 62 件へと増加した。「留学生理解と国際教育交流」、「海外留学と国際教育交流」などの授業に関するものや、留学生担当教員が単独で開講している授業などに関するものである。本学学生からの留学相談は、昨年度のべ 36 件から今年度 67 件へと増加した。

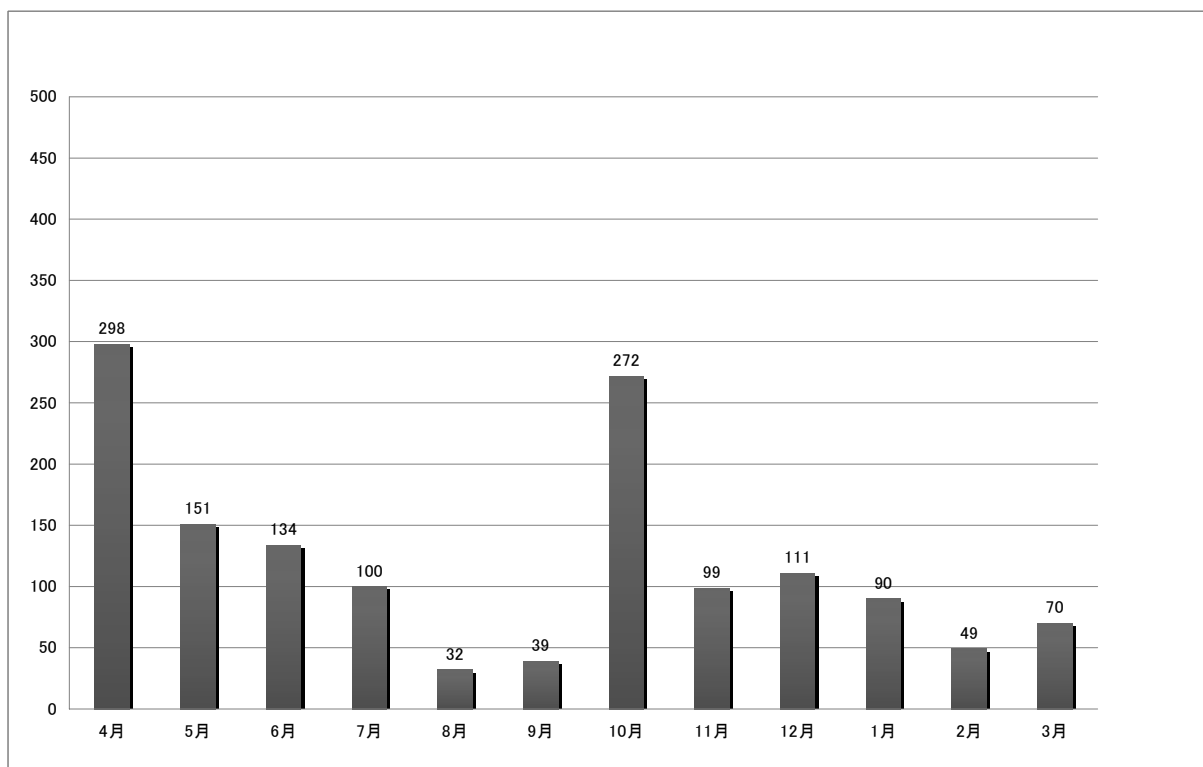


図 1 2008 年度月別来談者のべ件数

2. 留学生相談部門

表 2 2008 年度 相談内容別来談者状況

相談内容	のべ件数	%
チューター	259	17.9%
減免	191	13.2%
副申書	169	11.7%
チューターオリ	131	9.1%
留学相談	67	4.6%
教育内容	62	4.3%
推薦状	56	3.9%
履修	47	3.3%
宿舎・住居	45	3.1%
奨学金	38	2.6%
就職・進路	30	2.1%
進学	25	1.7%
在留資格	21	1.5%
オリエンテーション	20	1.4%
生活	18	1.2%
保証人	16	1.1%
会議	12	0.8%
健康（身体）	12	0.8%
健康（心理）	12	0.8%
地域	11	0.8%
人間関係	10	0.7%
ブリッジス	9	0.6%
危機管理	8	0.6%
行事申込	6	0.4%
サークル	5	0.3%
家族	4	0.3%
言語	3	0.2%
アルバイト	2	0.1%
その他	156	10.8%
合計	1,445	100.0%

② 来談者別内訳

表 3 来談者の内訳

来談者		のべ件数	%
留学生		970	67.1%
(内訳)			
学部生	388		
修士課程	270		
博士課程	63		
研究生	130		
センター生	15		
日研生	10		
交流学生	85		
学外	9		
日本人学生		253	17.5%
(内訳)			
学部生	189		
修士課程	41		
博士課程	17		
その他	6		
教員		43	3.0%
職員		98	6.8%
外部		48	3.3%
地域		15	1.0%
その他		18	1.2%
総計		1,445	100.0%

表 3 にある全来談者のうち、留学生による相談はのべ 970 件 (67.1%)、日本人学生の相談はのべ 253 件 (17.5%)、教員はのべ 43 件 (4.0%)、職員はのべ 98 件 (6.8%)、学外者 (学生を除く) の相談はのべ 63 件 (4.3%) であった。

留学生の来談者のうち、388 件 (40.0%) が学部生である。学生総数では学部留学生は大学院留学生の約 4 分の 1 なので、この比率はかなり高い。学部の 1～2 年次は指導教員がいないので授業料免除申請や奨学金などについての推薦を求めて来室すること、学部留学生はチューター制度を活用する人が多いこと、さらに大学院生はすでに日本で学部時代を過ごしている人が多いことなどが、学部生に相談が偏重する理由であろう。

2. 留学生相談部門

修士課程の留学生の来談はのべ 213 件と留学生全体の 25.1%を占める。大学院重点化により修士課程の学生数が大きく増加し、そのために奨学金の受給が難しくなって経済的な問題を抱える学生が少なくない。経済的に厳しい中で、単位の修得、修士論文の執筆、卒業後の進路と数多くの課題をこなす必要がある。研究生の相談件数はのべ 149 件で、留学生来談者に占める割合は 13.4%である。修士課程や博士課程の入学準備期である研究生の訴える問題は深刻なものが多い。

日本人学生の相談件数のうち 74.7%は学部生によるもので、その比率は留学生の学部生の比率に比べても更に高いが、チューター登録に来る学生の多くが学部生であること、教育内容や留学相談について来室した学生も学部生が多いことが主な要因である。また、主に学部生をターゲットとした短期海外留学や交換留学の相談が多いことから、学部生の占める割合が高くなっている。

なお、相談室には本学の留学生、日本人学生の他に、教職員（のべ 141 件、総数の 9.8%：教員 43 件、職員 98 件）からの相談や教職員とともに問題に対処するための相談がある。また、学外（のべ 63 件、総数の 4.3%）からの相談は、地域で留学生を支援しているボランティアが最も多いが、他にも行政機関の担当者、一橋大学受験希望者などからの相談がある。

2 予防・開発的活動

1) オリエンテーション・プログラム

4 月及び 10 月入学の大学院生、学部生、研究生、交流学生、日本語研修生（センター学生）、日本語・日本文化研修生を対象に留学生オリエンテーションを行った。なお、留学生オリエンテーションに出席できなかった留学生については留学生相談室で個別にオリエンテーションを実施した。研究生のオリエンテーションと交流学生のオリエンテーションは英語でもオリエンテーションを実施し、センター学生のオリエンテーションは英語でのみ実施した。

2) 国際資料室のチューター

個別チューターとは別に、全ての留学生が気軽に日本語のチェックや講義内容の疑問点などを相談できるように、国際研究館 1 階の国際資料室にチューターが常駐している。また日本人学生の留学相談にも応じている。チューターは大学院博士課程の学生に依頼し、月曜日から金曜日の 10 時から 1 時、2 時から 5 時まで、留学生や日本人学生からの相談を受けつけた。担当者の一覧を表 4 に示す。このチューター・システムに関する報告と分析は紀要第 7 号（井村倫子論文）、第 10 号（河野理恵論文）に掲載されているので、そちらをご参照願いたい。

表 4 国際資料室担当者一覧

曜 日	氏名・所属
月	斎藤真琴 (社会学研究科博士課程)
火	鶴田綾 (法学研究科博士課程)
水	ウリジャ (言語社会研究科博士課程)
木	青山允隆 (商学研究科博士課程)
金	後藤千織 (社会学研究科博士課程)

3) 国立国際交流会館における活動

国立国際交流会館には、4 名の日本人学生がフロア・リーダーとして居住し、来日間もない留学生の生活全般のサポートを行っている。指導主事 (秋庭) の指導のもと、フロア・リーダーと職員は 4 月の新入居者オリエンテーションに始まる各種イベントを企画し、毎月スタッフミーティングを実施している。昨年度の主な行事は以下の通りである。

- ガイダンス&ウェルカム・パーティー (4 月)
- 学期末のパーティー (8 月)
- ガイダンス&ウェルカム・パーティー (10 月)
- 立川防災館見学ツアー&BBQ パーティー (11 月)
- クリスマス・パーティー (12 月)
- フェアウェル・パーティー (2 月)

これ以外にも、各フロアでインフォーマルな集まりが開催され、学生同士で交流を深めている。

4) 小平キャンパス国際学生宿舎における活動

小平キャンパスの国際学生宿舎はオープンして 7 年目を迎え、留学生寮「International Student Dormitory Association of Kodaira (ISDAK)」の名称が定着した。国際学生宿舎指導主事 (阿部) のもと、一橋大学、東京学芸大学、農業工業大学、電気通信大学の学生 RA (レジデント・アシスタント) 14 名が居住者間の交流を推進している。昨年度は ISDAK 史上初の外国人留学生 (一橋大学の韓国人学部生) RA が誕生し、ISDAK 執行部の「国際化」に新たな歴史が刻まれた。今後四大学において、留学生 RA の採用は活発になることと思われる。

また、ISDAK 執行部と小平キャンパスの一橋寮、中和寮、院生寮執行部との対話の場を何度かつくり、寮の合同ウェルカム・パーティーを試行した。この結果、少しではあるが留学生寮と日本人各寮の執行部間に交流の意識が芽生えだし、今年度もいくつかの寮合同イベントが計画されている。

2. 留学生相談部門

RA が中心となって毎月企画、実施する居住者間交流イベントは、以下の通り昨年度も活発に行われた。

- ガイダンス&ウェルカム・パーティー（4月）
- 一橋学園南口商店街 市民ふれあいフリーマーケット参加（5月）
- ISDAK 春のスポーツ大会（6月）
- 夏の海水浴ツアー in 横浜（8月）
- ガイダンス&ウェルカム・パーティー（10月）
- ISDAK 秋のスポーツ大会（10月）
- 忘年会（12月）
- ISDAK 映画上映会（12月、1月、2月）
- 新年持ちつき大会（小平市国際交流協会と共催）（1月）
- 冬のスキーツアー in 福島（2月）

5) 異文化交流誌『Bridges』

『Bridges』24号(編集長：河野、副編集長：阿部)を編集し、2009年3月31日に発行した。今号は『Bridges』の最終号となった。表紙には留学生探訪旅行の写真を入れ込み、昔の表紙の面影を再現した。特集は自分の足元を見つめてみようという意図から「アジアへのまなざし、アジアからのまなざし」とした。その他にも、一橋大学の留学生と関わるサークルや地域の留学生支援なども紹介した。

6) 地域国際交流ネットワークとの協力

国立地域では、日頃より複数の国際交流ボランティア組織が外国人のためのサポート活動（日本語講座、ホームステイ・プログラム、生活相談等）に積極的に関わっており、フリーペーパーによる情報提供なども行っている。昨年度は、国際交流ボランティア組織の一つである「まほうのランプ」の協力を得て、外国人留学生・研究者の家族サポートネットワークの集まりを一橋大学として初めて開催し、国立市役所からも育児サービスなどの情報提供をしてもらった。この集まりを通じて、国立地域在住の日本人と外国人留学生・研究者の家族との横のつながりを広げることができた。

7) 留学生日本探訪旅行

年2回、1泊2日のバス旅行を実施手織り、教員のほか職員2名が引率に加わった。2008年8月5日～6日には木曽福島～白川郷方面（留学生36名参加、引率者：宮寄、小池、秋庭）、2009年2月12日～13日は箱根～伊豆方面（留学生38名参加、引率者：宮寄、桑原、河野）にて実施した。

3 海外留学相談と短期海外研修実施

1) 学内留学フェアと TOEFL セミナー

日本人留学希望者へのガイダンス及び協定校紹介を目的とした留学生課主催の留学フェアを 4 月 23 日 (水) に学内において実施した。交流協定校の紹介は交流学生及び帰国留学生が担当した。なお、全体会においては学外から、カリフォルニア大学東京スタディセンター副所長高橋香世氏、HEC 経営大学院日本事務所足立純子氏、ブリティッシュ・カウンシル前島衣都美氏、メルボルン大学エデュケーションセンター水留由起子氏をゲスト講師として招き、それぞれの大学、国、文化などについてお話していただいた。また帰国留学生の代表として、豪州のメルボルン大学に派遣留学された星野めぐみさん (商学部) が留学から得た経験についてのスピーチを行った。分科会においては各ブースに分かれての説明会が行われ、学生交流協定校 11 校のほか、ブリティッシュ・カウンシルが各国の大学の特色などの説明に当たり、一橋大学留学生課主催の「短期海外研修」である豪州・モナッシュ大学と中国北京大学、それにスペイン・ベルヘ (Berge) 社企業研修、中国留学相談ブースが設けられた。

また、日本での TOEFL 実施機関である CIEE (国際教育交換協議会) を招いて、TOEFL セミナーを 4 月 23 日 (水) 12 時 05 分より実施し TOEFL-iBT や TOEFL-ITP の説明を行った。

2) 短期海外研修 (オーストラリア・モナッシュ大学、中国・北京大学、スペイン・ベルヘ社)

異文化社会、政治経済、文化に触れる過程で多角的な視点を身につけ、また「アウエーで実力を発揮できる自信」を体得することを目的とした短期海外研修プログラムが導入されてから 4 年が経った。4 回目の開催となるオーストラリア・モナッシュプログラム、2 回目の中国・北京プログラムに加え、今年はスペイン企業派遣プログラムを開発したことにより、以前は如水会奨学金の交換留学制度しか存在しなかった本学の海外留学プログラムに、段階的な異文化体験の体系を提供することが可能になった。2006 年 3 月に第一期生をモナッシュ大学に送り出して以来、海外に留学する派遣学生数、プログラム数、プログラムの幅は着実に増えている (表 5)。昨年度は英語科教員による北米大学への海外語学研修プログラムに 70 名近くの学生が参加し、短期海外研修に対する需要が伸びていることを見ると、本学の海外留学の潜在ニーズはまだまだあるものと思われる。

今年度のモナッシュ大学短期海外研修は、2 月 21 日から 3 月 22 日まで、豪州メルボルンのモナッシュ大学にて実施した。現地での研修、ホームステイ、研修旅行等は、モナッシュ大学の子会社である MCPL 内にあるモナッシュ大学語学センターによって運営された。実施にあたっては、広報、オリエンテーション、ロジスティック面で国際教育交換協議会 (CIEE) 日本代表部の協力を得た。また、今回は本研修を埼玉大学、東京学芸大学、

2. 留学生相談部門

九州大学、名古屋大学、大阪大学の六大学合同コンソーシアム型で実施し、全体では 72 名の参加者があり、英語の能力別に 5 クラスに分かれて研修を受けた。本研修の最後には、参加学生が滞在中に各自の研究プロジェクトをまとめ上げ、英語での発表を行った。帰国後に行った北京大学、ベルヘ社との合同発表会では、モナッシュ研修から代表 2 名が英語で研修報告をした。

中国・北京大学研修は、本学唯一の海外事務所である北京事務所の協力を得て実施した。研修内容は午前中は中国語学習（北京大学プログラムに参加した他大学の学生を合わせ、約 100 名で中国語クラス 7 班が編成された）をメインに、午後は様々なアクティビティを実施した。その内容は、北京在住の OB による講義、中国人学生によるチューター補講、企業訪問、如水会北京支部との交流会、家庭訪問、北京大学日本語学科の学生との交流会、市内観光などである。広報、オリエンテーション、一部のアクティビティそして現地アドバイザーの手配は毎日エジュケーションの協力を得た。第 1 回目の参加人数は 5 名と少なかったものの、学生の満足度は非常に高く、2008 年度は参加者が 3 倍の 15 名となった。2008 年度は大学院生以外に留学生も 2 名も参加した。

2008 年度、新規に開発されたのは、マドリッドに拠点を置く総合商社ベルヘ社と一橋大学との共同運営による企業派遣プログラムである。夏季休業期間（6 週間）に 4 名、春季休業期間（5 週間）に 6 名が英語による企業実習に参加し、国際的なビジネスを通じての異文化体験を味わった。参加学生の中には大学院生、留学生、社会人経験者も含まれており、参加学生の多様性がこのプログラムの特徴となっている。プログラムが成功裏に実施されたことを受け、2008 年秋にはベルヘ社会長が本学を訪れ、杉山学長とキャリア支援の長期提携に関する覚書に調印した。また、夏季および春季休業期間のパイロットプログラムを実施した結果、受け入れ先のメンター手配がやりやすいとの理由により、次年度以降は春季休業期間にプログラムを行うこととなった。

表 5 留学生相談部門にかかわる留学プログラムの派遣学生数の推移（単位・人）

年 度	2004-05	2005-06	2006-07	2007-08	2008-09
交換留学（留学身分）による送り出し	24	23	32	27	33
短期：オーストラリア	--	17	24	34	29
短期：中国	--	--	--	5	15
短期：スペイン	--	--	--	--	10
合 計	24	40	56	66	87

4 授業

留学生相談部門にかかわる教員が担当した授業は以下の通りである。

① 日本語研修コース

科目名 (担当者)	コマ数	対 象	授業内容	時期・時間数
異文化体験ゼミナール (阿部)	2 コマ ／週	日本語研 修生	講義や体験学習、見学などを通して 日本社会の理解を深め、あわせて日 本文化への適応スキルを習得する。	4 月コース 10 月コース 各 60 時間

② 全学共通教育科目

科目名 (担当者)	コマ数	対 象	授業内容	時期・時間数
留学生のための 社会科学ゼミナール I (河野)	1 コマ ／週	学部学生	各自設定したテーマについて図書 館で調べたり、アンケート調査をお こなった。授業期間中数回レポート の中間発表をし、他の学生からフィ ードバックをもらい完成度の高い レポートに仕上げていくプロセス を踏んだ。	冬学期開講 各 30 時間
留学生理解と国際教育交流 (阿部・河野・柘植・秋庭・太田)	1 コマ ／週	学部学生	日本の留学生事情と国際教育交流 の政策、異文化心理学・異文化適 応について学んだ。	夏学期開講 30 時間
海外留学と国際教育交流 (阿部、河野、太田)	1 コマ ／週	学部学生	海外留学を希望する学生を対象に マクロな視点から留学を考えると ともに、海外留学に伴う生活や異 文化適応、留学とキャリアについて 自らの考えを深めた。	冬学期開講 30 時間
ジェンダーと心理学 (柘植)	1 コマ ／週	主に学部 学生	ジェンダーが心理学の諸理論でど のように捉えられているのか、ど のような研究がなされているのか に焦点をあて、ジェンダーと切り 離すことの出来ない個々人の内省 を促した。	冬学期開講 30 時間
Introduction to Counseling Psychology (柘植)	1 コマ ／週	主に学部 学生	カウンセリング心理学を学ぶ上で 欠かせない倫理、資格を 押さえた上で、理論、カウンセリ ングスキル、心理テスト、精神病 理学などの基本を紹介した。	夏学期開講 30 時間

③ 学部教育科目

科目名 (担当者)	コマ数	対 象	授業内容	時期・時間数
社会学部 社会・人文の日本語 I・II (河野)	1 コマ ／週	対象は主 に学部 2 年、研究 生、日研 生、交流 学生	留学生センターが独自に作成した 教科書『留学生のための日本研究 案内』を精読する。論文特有の表現 を理解し、内容を的確に理解する。 また、各分野における主要な概念や、 論じられている事柄の背景につい て基礎的な知識を学ぶ。	I が夏学期、 II が冬学期開講 各 30 時間

2. 留学生相談部門

④ 大学院科目

科目名（研究科・担当者）	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
総合社会科学日本事情 （社会学研究科） （河野）	1コマ ／週	修士1年の留学生、研究生、日本人大学院生	特定の「日本人論」を取り上げ紹介するのではなく、さまざまな「日本人論」「日本文化論」をとりあげる。それらを自分の身のまわりの日常レベルから再検証し、批判的に考察する。また、「日本人論」についての自分の研究的立場を明確にすることが狙いである。	夏学期開講 30時間

（文責、集計：阿部 仁／編集：阿部 仁・河野 理恵・柘植 道子・秋庭 裕子）